

## お金 2.0 新しい経済のルールと生き方

著者：佐藤航陽

出版：幻冬舎

### 第3章 価値主義とは何か？ (p177~211)

#### 社会的な価値ソーシャルキャピタルの可視化 (担当：三富 p177~188)

①私たちが普段扱っているお金や不動産などの「どれだけお金を増やすことができるか」で評価される資本をマネーキャピタル（金融資本）といい、一方でお金は増えないが社会的に価値のある資本のことをソーシャルキャピタル（社会的資本）という。

②ソーシャルキャピタルは社会が持続的に良い方向で発展していくための「社会的なネットワーク」を「資本」として捉える考え方

→資本主義によるいきすぎた利己主義が社会全体を崩壊させる危険性を持つためこのような考え方が注目されるようになった。

③今まではマネーキャピタルを増やすことが上手い人が大きな力を持っていたが、これからはソーシャルキャピタルを増やすことが上手い人も大きな力を持つようになる

→取り組みが社会的に価値があると多数の人に思われることができれば、その反応はソーシャルメディアによって瞬く間に世界に広がり、ビットコインやクラウドファンディングによって国境を超えて価値を移動することができるため社会的に価値のある取り組みは経済を大きく動かす力も持つようになる。

#### 営利と非営利の境界がなくなる

消費者が世界中の情報にアクセスできるようになったことで企業が劣悪な商品を買わせたり、一方的に有利な条件で売りつけたりすることができなくなった

→本当に価値のあるものでしか利益を得ることができない価値と利益がイコールで結びつく時代になりつつある。

逆に今まではビジネスとして魅力的に映らなかった研究開発事業や社会貢献事業もそれに価値を感じる支持者を集めることでビジネスとして成立しつつある。

例) テスラ・モーターズによるロケット開発、グラミン銀行による貧困者のための金融機関など

スマホやブロックチェーンなどのテクノロジーの発展によってこの考え方はさらに加速していく。

全体の流れを見ると社会的に価値のある取り組みが利益を出しやすく、価値を考えず利潤のみを徹底的に追求する取り組みは利益を出しにくくなるため数十年後には「営利」、「非営利」という区別はなくなり全ての活動が「価値」の視点から捉えられるようになる。

### 経済と政治の境界も消える

価値という視点で政治と経済を捉えると両方とも「人々の生活をより良くしよう」という共通の考えがあるため2つの活動がお互いの苦手な領域をカバーし合うことで生活の向上が望める。

例) 貧困という政治的問題を前述のグラミン銀行が経済のフィールドで解決  
経済的な活動には「公共性」が求められ、政治的な活動にはビジネスとしての「持続可能性」が求められるようになっていくと政治と経済の境界が曖昧になっていく。

### ベーシックインカム普及後のお金

ベーシックインカムとは

→生活するための必要最低限の生活コストを国民全員に支給する仕組みであり、現在行われている生活保護を国民全員に適用するような仕組み。ここではお金だけでなく企業が自社の製品のテスターとして無償提供する場合もある。

テクノロジーが発展していくと多くの人が失業してしまうため導入されると考えられる。

ベーシックインカムが導入された後の「お金」

ベーシックインカムが導入されるとお金は「なくてはならないもの」から「あったら便利なもの」に変わっていく

→ベーシックインカムはお金のコモディティ化を急速に押し進めていく

### コメント

本当に価値のあるものに利益が生まれるのはとても良いことだと感じたが、お金のコモディティ化についてはそれが本当に良いことなのか疑問に感じた。

### 「経済」は選べばいい (担当: 前澤 p188~201)

・著者が本当に言いたいのは「複数の経済システムは並存し得る」という点。ネットが十分に発達した世界では「どれも正しい、人によって正解は違う。」という考え方が受け入れられても良く、一つに統一する必要はない。

→何に価値を感じて、どんな資産を蓄え、どんな経済システムの中で生きていくのかを自分で選ぶことができる。そういった個人が自分に適した経済を選んでいくという「選択」がある。

例 沖縄の琉球コイン

・簡単に通貨を発行し、独自の経済システムで地域経済を盛り上げる

→複数の経済圏が競争しながらより良いものが生き残っていくという競争と淘汰の原理が経済システム自体にも働いていき、格差問題を和らげることができる。

・シェアリングエコノミーやブロックチェーンといった分散を促す技術により、「二重の分散」が進む。

・二重の分散

→経済圏も複数に分散していて、その中に存在するサービスも管理者不在で機能する分散したネットワーク上で完結する状態。

**複数の経済圏に生きる安心感**

・現在の資本主義経済の中で居場所を作れない人でも、まったく違うルールのオンラインエコノミーでは活躍できる可能性があり、異なるルールの小さな経済圏いくつもあれば、何度もやり直しがきく。

例 コミュニケーション能力が求められる職場ではうまく結果を出せないが、歌うのがうまい人 (プロほどのうまさはない)

・現実社会…カラオケの二次会で盛り上がる程度

・今後の世界…ネット上に歌っている動画をアップして、サービス内でファンができればサービス内のトークンを報酬として受け取れる。人気が落ちてても別のサービスで同様の活動を始めるとも可能。

→複数の経済圏が並存すれば、既存のメインストリームの経済から外れてしまった人にも膨大な選択肢を与えることになり、それによって多くの人がリスクを取って積極的に活動できるようになる。

**「時間」を通貨とする経済システムの実験**

・お金と時間の2つの特徴を混ぜた「時間経済」

・タイムバンク…様々な時間を売買、保有、利用することができる。専門家は自分の時間をタイムバンク上で売り出して、資金を得ることが可能。ユーザーはその時間を購入して利用できる。

・実験では3つのことを実現できるか試す。1つは経済を選べる時代を作れるか。

① 個人が主役の経済 ② 時間を通貨とする経済

① 個人が主役の経済

・インターネットによって今まで大企業がやってきた業務を個人ができるようになった。

例 ブログで自分の文章を公開 YouTube で自分の歌を配信

・しかし企業と同じように稼げている個人はほんの一握り。

・個人と企業の大きな違いは「資産」。個人が収入を得る手段は増えたが、個人が資産を得る手段がない限りは、個人は経済の主役にはなれない。ではどうすべきか…

→個人にとっての「時間」を実質的な資産として機能させることができれば、自分の価値にレバレッジをかけた経済活動の展開が可能。

例 保有時間に対して一定の金額が毎月支払われる「時間利子」

時間に市場価値がついていれば、時間で「支払う」ことも可能になる

② 時間を通貨とする経済

・通貨のアンカー…船が流されないように下ろす碇のように、通貨がふわふわと消えてしまわないように価値を下支えする「重し」を指す。アンカーの実在性が高いほど通貨は安定。

→「時間」はアンカーとして相性が良い。

・明確な資産として認められている空間。ネットとスマホが普及してデータとして認識できるようになった時間。システムにとってこれらはただのデータに過ぎないため、時間を本当に資産として扱える技術的な土台はすでに整いつつある。

・時間が通貨や資本として良いのは、経済の「新陳代謝」という点で優れているから。

・現在の経済は「金融資本」は時間が経つほど価値が増大していくが、時間が財産だった場合保有量は自然と減っていく。

→保存できない上、どうせ使わなければ自然消滅するので、これを使って何かをしようとする人が増えるはずである。ゲゼルのスタンプ貨幣に近い。

・結果として時間を多く保有する者がリスクを取って挑戦するため、経済の新陳代謝が促される。このような仕組みは少子高齢化社会でも経済を活性化させる手段になるかもしれない。

#### コメント

経済を選ぶことができるようになったら、リスクを恐れずに積極的に自分のやりたいビジネス活動を進めることができるようになるが、失敗してもその経験を次に繋げて同じことをやり続けることも大事ではないかなと感じた。また、時間経済は年齢によって時間という資産の量が異なるため、それこそ格差につながるのではないかと感じた。

#### タイムバンクと VALU の正体 (担当：須藤 P201~211)

##### ➤ VALU について

- ・小川晃平が行う個人の価値をトレードできるマイクロトレードサービス。
- ・クラウドファンディングの用途とは異なる。
- ・個人の活動を応援したい時に、その個人が発行する VA を購入して支援。
- ・VA は市場で売ることが可能。

⇒VALU は個人の価値に焦点を絞る。個人の価値を市場で決めてもらう。

⇒信用・影響力・評価・期待値などの価値が可視化されて織り込まれる。

##### ➤ 別の経済システム誕生について

- ・上記の VALU とタイムバンクの原理は一緒。
- ・その原理とは、価値があると感じたものをネットを使って可視化+経済の原理を適用。
- ・当然、懐疑の目を向けられるが…(ex.金本位制の終了)
- ・各自が自分に合った経済を選択し、それに需要があれば試行錯誤をしながら、その経済は残っていく。

#### デジタルネイティブからトークンネイティブへ

##### ➤ 導入

- ・ビットコインは金融系や経済系の学者には受け入れられないものだった。  
⇒既存の経済の枠組みで新しいものを捉えて評価してしまうから。
- デジタルネイティブについて
  - ・学生時代からパソコンやネットが当たり前にある環境で育った世代。
  - ・上記の機器等が当たり前にあるので、それらが登場した前後は比較できない  
⇒それらが存在する以前の世の中における常識や、その後の変化については分からない。  
⇒しかし、過去を調べると自分にとって当たりのサービスも様々な議論の末、当たりのインフラになっていることが分かる。
- トークンネイティブについて
  - ・生まれたときからビットコインやブロックチェーンに当たりに触れて使いこなすことが出来る世代。
  - ・デジタルネイティブ世代はトークンネイティブ世代が作るサービスが理解できない。  
⇒既存の経済の枠組みで新しいものを捉えて評価してしまうから。
  - ・ダグラス・アダムスの言葉『人間は～自然に反するものと感じられる』  
⇒人間の脳は一度常識が出来上がってしまうと、その枠組みの中で物事を考え判断する。そして、新しく誕生した技術などをバイアスなしに見ることは難しい。

### 「価値主義」とは経済の民主化である

- お金や経済の民主化
  - ・国家の専売特許であった通貨の発行、経済圏の形成が新しいテクノロジーの誕生によって誰でも簡単に低コストで実現できるようになりつつある。  
⇒ブロックチェーン上でルールを記述。トランザクションを見ながら改善を繰り返す。  
スマホがあれば経済圏に参加可能。
- 資本にならない価値で回る経済の実現
  - ・私たちが言葉として使う価値を3つに区分する。
 

{	<ul style="list-style-type: none"> <li>①現実世界で役に立つかという有用性としての価値</li> <li>②個人の感情と結びついた内面的な価値</li> <li>③共同体の持続性を高める社会的な価値</li> </ul>
---	---
  - ・資本市場では①のみを扱ってきたので、②は無価値。③はお人好し・コスト。
  - ・しかし、②と③は間接的に経済に影響を及ぼしており、①のみを追求した経済の長期存続はない。
  - ・価値主義において、新たなテクノロジーの誕生により②と③を可視化させ、経済として成り立たせる。そうすることで、資本主義の欠点を補完可能。
  - ・今までの常識からすれば、非現実的な話。
  - ・過去の常識が新しい価値観に上書きされていき、新しい価値観が常識になったかと思うと、すぐに新しい価値観による上書きが始まる。

## コメント

- ・前回の講義において、VALU は個人の信用・影響力・評価・期待値などを可視化させて取引が行われるということを学んだ。そのことを受けて、私はこの取引方法には反対であると同時に、長くは続かないと推察した。理由は、VA を発行した個人が過去に過ちを犯していたら、信用はもちろん無い上に、もし更正して立派に生活していても期待値はほぼ無い状態になる。そのような状態で VALU を選択する人はいるのだろうかと考えたからである。(経済は選択すれば良いと書いてはあったが…)
- ・『過去の常識が新しい価値観に上書きされていき、新しい価値観が常識になったかと思うと、すぐに新しい価値観による上書きが始まる。』とあったが、今の日本における取引において、円を介するやり取りになった前後の動きに興味を湧いた。